

# 近代人種主義と17・18世紀思想

高 田 紘 二

はじめに

## I 近代人種主義の起源と発展

## II 近代人種主義と17・18世紀思想

### ① その前提的考察

### ② いわゆる「劣化・退化理論」について（以上本号）

### ③ いわゆる「前アダム人論」について

おわりに

## はじめに

ブラッケンは、ある論稿を、次のように始めている。すなわち、「この論文で、私は、人種主義がわれわれの文化に固有のものであると考えている。」<sup>(1)</sup>、と。また、デリック・ベルは、『人種主義の深い淵——黒いアメリカ・白いアメリカ——』で、「アメリカにおける人種主義は、いつか治せる心得違い——少し前にはそう信じたこともあったのだが——といった程度のものではないという、わたしの悲しいメッセージ」<sup>(2)</sup>を伝えている。現在でも、世界各地で、その直接的原因と契機が種々のものであれ、その根底に人種主義的差別を隠し持っている対立と抗争・戦争の事実には、枚挙のいとまもないといった状況にあることは、いろいろなメディアによるいろいろな情報から知ることができる。

近代は、イギリスのふたつの革命、フランス大革命、アメリカ独立革命といった、市民革命によって象徴され、また、これらの市民革命の補完・あるいは発展と見なすこともできる、ロシア革命や植民地解放闘争や民族解放闘争によって、人間の自由と平等、差別と抑圧からの解放の時代として特徴づけられると同時に、他民族の征服と略奪・絶滅、民族や国家間の種々の抗争や戦争の連続する時代でもあったことは良く知られている。この

ことは、近代を象徴するといえる、個人の人権や生命・財産の保護や保証といった、基本的人権の確立とは、これらの人権の抑圧と蹂躪という、非人間的な事実と対立するものではなくて、メダルの裏表のように引き離すことができない両面をもったものであったことに気づくのである。この意味で、歴史研究は、大きな意味をもっているといわねばならないが、このような両面的な側面を統一的な視点から捉えなおすことも必要になってくるものと思われる。<sup>(3)</sup>この時には、歴史には、あれこれの良いこともあったし、あれこれの悪いこともあったというような形式論理的な歴史観では、役にたたないであろう。ここでは、マルクスが『哲学の貧困』で、プルードンが商品経済について、その良い面を残して悪い面を除くことによって批判的に発展させようとしたのを批判した弁証法的な分析方法こそが見直されるべきと思われる。

本稿は、以上のような視点から見られた、近代人種主義の起源と発展について、その17・18世紀思想との関係を分析する、ささやかな試みの一端である。

## I 近代人種主義の起源と発展

ポップキンによれば、近代人種主義の起源は、15世紀のスペインで始まる。もちろん、ある集団

の他の別の集団にたいする優越性の正当性とこの優越性の永続性を生物学的・心理学的・精神的な諸要因の上に基礎づけることによって、他の集団・民族・人種などを差別・抑圧することは、人間の歴史とともに古いのだが、古代ヘブライ人や、初期キリスト教徒やギリシャ人のそのような、初期の人種主義的見解は、「ユダヤ教徒やキリスト教徒がやったように、優越的な集団への改宗によって、言いたてられた〔差別された集団・民族・人種などの〕劣等性を克服する道か、あるいは、ギリシャ人が“野蛮人〔バルバロイ〕”と呼んだ人々にたいしてやったように、〔かれらギリシャ人の文化・慣習・習俗への〕帰属の過程（すなわち、ギリシャ語を話し、書き、ギリシャ語で考え、生活することを学ぶという）を承認する道」<sup>(4)</sup>を、提案していた。

ところで、ポップキンの言う、15世紀スペインを起源とする、「新種の人種主義」とは、十字軍を契機として強まる、キリスト教勢力によるイスラム教勢力からの国土回復運動と、13世紀に始まる、いわゆる「レコンキスタ」によるイベリア半島での、キリスト教勢力の武力回復運動の発展の頂点である、1492年のグラナダ陥落とともに出されたユダヤ人追放令によって確立される。この時までに既に強制的にカトリシズムに改宗させられたユダヤ人たちは、かれらのこれまでに築いてきた財力と社会的地位にもとづいて、じょじょに、カトリシズム教会で有力な指導的地位を獲得しつつあった。そこで、これに対処・対抗するために、いわゆる旧キリスト教徒が、新キリスト教徒や改宗者（主としてユダヤ人の）<sup>(5)</sup>から、「生物学的根拠にもとづいて」<sup>(6)</sup>分離される政策がとられることになった。ポップキンによれば、5世代前にユダヤ人の先祖をもっていたものは、依然として、新キリスト教徒であり、コリッジに入学できず、ほとんどの宗教団体に参加できず、公職や他の制限された職につくことができなかった。このために、人々は、「劣等な集団、ユダヤ人に属していないことを証明するために、“血統の純粋性”の証明書を作らなければならなかった。」<sup>(7)</sup>

そしてまた、「この状況を監視し統制するために、また、ユダヤ人の先祖をもつものが何を信仰しておろうと、あるいは、どんな教会に属してお

ろうと関係なく、確実に社会の主流から分離し隔離されたままの状態にしておくために、異端審問＝宗教裁判所が、設立された。」<sup>(8)</sup>

ところで、このような契機と背景をもって生まれた「新種の人種主義」は、少数者の被征服民の集団にたいする差別・抑圧の、それ以前の形態とは、その性格を異にしていた。というのは、グラナダ陥落直後にみられた寛容政策は、キリスト教会指導者たちの狂信的な「宗教的純粋性」の追求からくる、反ユダヤ主義にたいする次第次第の民衆の支持の高まりとともに、「改宗か追放か」の二者択一を迫る、ユダヤ人追放の勅令が、出されるに至るのだが、この勅令そのものは、住民の宗教的な存在性格とその純粋性を問うことが中心であって、異端審問とそれにもとづく宗教裁判は別にして、必ずしも、なんらかの法的な処置によって集団の差別状態の継続を承認するものではなかった。それゆえ、非合法であったとはいえ、あるいは、非合法にもかかわらず、「人々は、かれらの素性を変えることができたり変えたりしたし、隠れることができたし隠れたりしたし、異端審問が機能していない別の世界へ逃げたりできたし逃げたりした」<sup>(9)</sup>のである。

ところで、この新しい人種主義を正当化するためのいろいろな理論が、このようなユダヤ人改宗者（いわゆるマラーナ）に対処するために、15世紀のカソリック・スペインに現れ始め、それから、「アメリカの発見」の後、インディアンを、そして後に、奴隷化されたアフリカ人に対処するために、拡大・発展された。

最初のこのような理論は、ユダヤ人改宗者すなわち「新改宗者〔新キリスト教徒〕を古い信仰者〔旧キリスト教徒〕から分離し、前者を永遠の第二級の市民にしようと試み」、さらに進んで、15世紀が始まると、スペインの権威者たちは、このことを、「生物学的および精神的に、ユダヤ人（そして後にはイスラム教徒）は、決して完全に変えられることできない性格をもち、これらの性格は、危険なあるいは破壊的な行動を導くであろうということに基づいて、正当化した。」<sup>(10)</sup>

この新しい人種主義の適用拡大は、コロンブスのいわゆる“発見”を契機とするスペイン・ポルトガル人による「アメリカの征服と強奪」<sup>(11)</sup>に始まる。この時、アメリカへわたって、土地や財産

や自由を支配しつつあった人々は、ヨーロッパの局外者であり、ヨーロッパ社会できちんとした役割を全くもっていないような人々であった。かれらを大陸へわたらせたのは、一方で、キリスト教の普遍的普及を夢見る宗教的熱情ときわめて世俗的な「エル・ドラド」＝黄金獲得の熱病的欲望であった<sup>(12)</sup>が、征服と強奪にたいする、先住民族の抵抗と挑戦に直面して、「すでにイベリアで機能していた、手の込んだ人種主義の諸理論と諸方法」<sup>(13)</sup>が、導入されることになった。

ところで、ポップキンによれば、コロンブスは、アメリカ大陸に到達した後に、①発見された住民は誰であるのか、そして、②かれらは本当に人間なのか？、という宗教的・哲学的な問題に直面させられた。これにたいして、それ以前のユダヤ人問題は、キリスト教史では、既に、ユダヤ人に、生まれながらの悪玉、キリストの殺人者、そしてキリスト教の永遠の敵対者の役割を与えていた。しかし、インディアンは、未知のひと・ものであった。

このような問いにたいする、18世紀までの答えのほとんどは、『聖書』のなかで与えられた枠組み内で進行した。<sup>(14)</sup>

第②の問題にたいする解答として、コンキスタドーレス（探検家たちと征服者たち）の独自の現地報告をもとに、ふたつの異なった理論が与えられた。ひとつの見解は、インディアンは人間以下あるいは人間に近いものがあるというものであり、他の見解は、かれらは高貴なる野蛮人であるという意味で他の人間よりもいっそう優れているというものであった。

前者の見解では、インディアンの不完全な人間性を確認しようとする人々は、証拠として、インディアンが抽象的な思想をもつことができないこと、かれら自身の世界を管理・運営できないこと、キリスト教徒となることができないこと、道徳的であることができないこと（かれらが男色を行い、人身御供を行っているがゆえに）、そしてそれゆえに、スペイン人とポルトガル人がかれらの生活の管理を肩代わりしなければならぬインディアンの全世界について助言しなければならないことを、提示した。<sup>(15)</sup>

コンキスタドーレスたちは、もちろん、アメリカ大陸への「到達の瞬間から、文字どおりこのこ

とを実行した。」<sup>(15)</sup>このような見解とそれにもとづくアメリカと先住民族の征服と強奪に真っ向から反対した主要な人物のひとりが、ラス・カサスであった。ラス・カサスのインディアンとかれらの人間性の擁護への思想的回心が表面化したのは1512年頃と見られる。この時以後、約半世紀にわたって、かれは、インディアンの人間性の偉大な弁護者として、「... 世界のすべての人々は、人間であり、... すべてが理解力と意志力をもち、すべてが6つの外的感覚と4つの内的感覚をもち、これらの対象によって動かされるし、すべてが良きことに満足を感じ、幸福とおいしいものに喜びを感じるし、すべてが悪を悔い憎む。」<sup>(16)</sup>と主張しながら、セプルベータや他のスペインの理論家たち<sup>(17)</sup>と、この問題について精力的な論争を展開した。<sup>(18)</sup>

ラス・カサスとかれの支持者たちは、「理論上の議論では勝利し」<sup>(19)</sup>て、スペイン政府と法王とに、インディアンが完全な人間であり神の創造の賜物であることを承認させることができ、法王パウロ3世は、1537年の教皇教書で次のように宣言した。すなわち、「われわれは、... しかしながら、インディアンが真に人間であること、そして、かれらがカソリックの信仰を理解することができるばかりでなくて、われわれの情報によれば、かれらはさらに進んでそれを受け入れることを望んでいると考える。」<sup>(20)</sup>と。

しかしながら、ラス・カサスとかれの支持者たちの「理論上の議論での勝利」にもかかわらず、「実質上」は、どのような良きキリスト教的人道的な議論を提出することができようとも、かれらは、アメリカの征服と強奪・略奪を止めることができなかった。<sup>(21)</sup>

15世紀に現れ始めた、「血統の純粋性」にもとづく反ユダヤ主義の発展・拡大として生まれた「新種の人種主義」は、いまや、インディアンの不当な扱いとアメリカ大陸での定住・開発のための労働力として、急速に死亡しつつあったアメリカの先住民に代替するために導入され始めたアフリカ人の奴隷化とを正当化するための理論的支柱として、決定的に重要であった。

この意味で、1547年から1550年にかけての、いわゆる「ラス・カサスとセプルベータの前哨戦」と、1550年から1551年にかけての「バリャドリ大論戦」

として知られている、スペインでの大論争<sup>(22)</sup>は、来るべき時代に現れてくる多くの人種主義をめぐる諸問題のほとんどすべてを予示していたと言われる。それゆえ、次のように結論できる。すなわち、「最初に、16世紀のスペイン人とポルトガル人によって、主として、インディアンについて与えられた、諸理論、そしてそれから、17世紀と18世紀に、主としてイギリス人、イギリス系アメリカ人およびフランス人によって、アフリカ人について与えられた諸理論は、次の数世紀のあいだの人種主義思想の基本構造を提供している。」<sup>(23)</sup>

## II 近代人種主義と17・18世紀思想

### ①その前提的考察

ポップキンによれば、「ラッセルとウィットゲンシュタイン以前の主要な知的英雄」<sup>(24)</sup>とされるヒュームの「理性の実験的方法の倫理的諸主題への適用と呼ぶ」<sup>(25)</sup>「人間の科学」<sup>(26)</sup>が、「肌の色をもつ人々にかんする、近代の人種主義諸理論はもちろん、反ユダヤ主義のためのひとつの世俗的な基礎にたいする基本的正当化を生み出したのは、この啓蒙主義の間であった。」<sup>(25)</sup>

ところで、前述の議論をここで要約しておけば、次のようになるであろう。すなわち、スペイン人種主義理論家たちの基本的議論は、インディアンが、かれらの非論理性、不道徳性および思慮深い決定をする能力の欠如によって証拠づけられているように、完全な人間ではない、あるいは、人間以下であるということであった。これらの証拠は、アメリカで生じていた事実（これ自体がスペイン人によるアメリカの征服と略奪の結果そのものに過ぎなかったが）にあると断言された。こうして、インディアンとかれらの行動にかんする現状のすべての状態は、かれらが理性的で道徳的な人間（すなわち、カソリック・キリスト教徒）の指導と支配を必要かつ必然としており、それゆえ、かれらが、アリストテレスの言う自然的「生まれながらの」奴隷であることを明示していると理解された。このような理解にたいして、ラス・カサスによって率いられた人道主義的反対派は、インディアンの理性の働きと道徳性と同時にヨーロッパ人の悪徳を証拠立てる他の諸事実を提供した。また、インディアンの行動に欠けているように思えるものは、真のキリスト教にもとづく訓練と教育によっ

て克服されることができると主張した。したがって、ヒューマニストたちにとって、インディアンは、すくなくとも、いま現在劣った人間であるかもしれないけれども、完全な人間となる潜在性・可能性をもつ存在であった。<sup>(27)</sup>

もちろん、このような人種主義的見解はその反対派をふくめて、どちらも、キリスト教的枠組み、『聖書』の枠組みを、その認識の理論的基礎としていたから、アメリカ・インディアンの起源にかんする、16世紀と17世紀の文献のほとんどは、その起源を、『聖書』のある集団まで辿ろうと試み、インディアンとアフリカ人の現在の未開な状態は、キリスト教“文明”世界からのかれらの孤立のゆえか、あるいは、『聖書』のなかに説明されている、いくつかの神の行為のゆえによるか、いずれにしろ、その結果である、劣化の過程として、説明された。<sup>(28)</sup>

以上のような、キリスト教思想にもとづく人種観・人種理解が、近代人種主義の基礎をなしていることは、人道主義的キリスト教徒たちでさえ、上述の劣化の過程の結果も、かれらのキリスト教化とかれらにヨーロッパの教育と文化の“恩恵”を与えることを通じて矯正可能と見なしていたことを考えれば、依然として真理であることは明白である。

しかしながら、ポップキンによれば、近代人種主義の哲学的擁護は、『聖書』の説明を拒否し、無視するか、修正するかする人々によってなされたのである。それは、人間の多様な起源は異なった人間性を暗黙のうちに意味するとする説明とともに、人間の起源の多元的説明を考えだそうと試みたり、非白人あるいは非キリスト教徒であることは生物学的あるいは心理・精神的な病気であり、これらに伝染した人々を現在のように劣ったものにしていくとする、劣化の説明を、考えだそうと試みた。

ところで、一般的に見れば、ルネサンスから啓蒙主義までの西洋哲学において、人間性にかんして支配的であった理論は、肌の色や宗教と関係するものは全く何ももっていなかったと言って良いであろう。これらの人間性・人間の本質にかんする論は、「人々の外的な様相、かれらの大きさ、形、肌の色、あるいは、宗教的慣習について、中立であるべきことを意味している。」<sup>(29)</sup>

しかしながら、「ロック、ヒューム、ヴォルテイル、フランクリン、ジェファスン、カントのような、啓蒙主義の哲学的英雄たちの多くが今日ひどく人種差別主義的に聞こえる見解を表現していることに気づくように」<sup>(30)</sup> なってきた現在、このような人種主義的な諸理論・思想が、どのようにして、かれらの普遍的な人間・人間性論から生まれてきたのか、そこでは、どのような過程を経て、論理の転化と論理のすり替えが可能であったのだろうか、問われることになる。<sup>(31)</sup>

ポップキンによれば、この変化は、大きく見て、ふたつの過程をへて生じる。ひとつは、いわゆる「劣化・退化理論」である。この理論の発展は、「啓蒙主義の“人間の科学”」によって、「ある人間がかれらの現在の悲惨で恐ろしい状態へ如何にして退化したかにかんする、詳細な科学的説明[と称するもの]とともに、生じる。」<sup>(32)</sup> 他のひとつは、19世紀において科学的な理論として登場する（それはダーウィンの進化論に対抗して）人類の多元的発生論へと発展していく、「異端的な前アダム人論」による、「非アダム人（もちろん、非白人である）の固定的で劣等な地位・身分についての強力な説明」<sup>(33)</sup> とともに、生じる。

## ②いわゆる「劣化・退化理論」について

劣化理論は、なによりもまず、ジョン・ロックの諸見解のなかにそれ自身の姿を現し始める。

近代的な人権思想の理論的な完成者たるロックは、すべての人間の生まれながらの平等性と生命・自由・私有財産にたいする天賦・所与の自然的権利の保持を強調するのだが、他方で、かれは、ふたつの理由で、かれのこの普遍的原理を、17世紀アメリカ植民地とそこでの先住民たるインディアンと購買を通じてとはいえ強制連行されてきたアフリカ人奴隷には適用できない、あるいは、適用してはならないと考えていた。すなわち、「(a) インディアンとアフリカ人は、かれらの土地を適切に利用していないがゆえに、(b) かれらは、“正義の戦争”で捕らえられたのであり、それだから奴隷化されることができるゆえに」、「[人間の]創造での平等と自然権の所与」というロックの普遍的原理は、「もはや、17世紀のアメリカに適用してはならなかった。」<sup>(34)</sup>

イギリスの植民地政策に私的にも公的にも深く

かかわっており、奴隷制を公然と認めたカロライナ憲法の起草者でもあった、ロックによれば、神から全人類に与えられた、地球上の土地を、労働を媒介として、私有財産としそれを人類の生存のために利用すること、さらに、私有財産の耐久性と流動性を確保しうる、普遍的な私有財産たる貨幣を創造することに失敗したとみなされる、インディアンとアフリカ人は、「かれら自身の失敗のゆえに、かれらの自然権としての私有財産を全く持っていなかった。」かれらの土地は、「荒蕪地」であり、これを利用しようとするヨーロッパ人にたいする抵抗と敵対は、「死に値するなんらかの行為」であり、これによって、かれらは生命・自由・私有財産にたいする自然権を失ったのであり、それゆえ、ヨーロッパ人によるかれらの土地の私有財産としての取得・奪取とかれらの奴隷化が正当化された。<sup>(35)</sup>

ポップキンによれば、ロックは、現状の進行を、アメリカとアフリカの先住民たちの個人的な失敗のためだと見なしたが、かれらが何故失敗したのかについては、もっと多くの説明が必要であった。

このような説明による、劣化理論の強化・発展のひとつの典型は、ビュッフォンによって打ち立てられた。それによると、白い肌から黒い肌へ変化をふくめて、ある人々を、ヨーロッパ人の生活様式よりはるかに劣った状態へと導いた諸要因には、かれらの生活環境（特に気候）と社会環境（非キリスト教など）がふくまれている。<sup>(36)</sup>

人間性とその文化の特徴を説明する原理として、地理的環境（特に気候）を重視したのは、モンテスキュであったが、この理論を、完全な人種主義的説明原理にまで“完成”させたのは、18世紀最大の博物学者、ビュッフォンであった。かれは、『自然誌』で、次のような説明を与えた。すなわち、ビュッフォンによれば、「白は、まさしく、自然の始元の色であるように思われる」し、また、いろいろな人々は「気候、食物、生活様式、伝染病、そして、異なる諸個人の混交の影響によって、多様な変化をこうむった」という前提にたてば、黒い集団、黄褐色の集団、黄色の集団、褐色の集団および劣った白色の集団（ラップランド人とエスキモウを指す）——このことは、まさしく、永遠である——を生みだした、これらの変化は、人間の人種のほとんどにかんするかなり陰鬱な描画

を生みだした。すなわち、「かれらはのろまで迷信的で、愚かである。」(エスキモウ)、「かれらは、のろまで愚かで野獣のようである。」(タタール)、かれらは「優柔不断で、温和で、怠惰で、迷信的で、従順で、格式張っており、依存的である。」(中国人)、「かれらの怠惰と愚鈍は、あらゆる(有益な)喜びにたいして、かれらが無感覚にする。」(シエラ・レオーネの黒人たち)、「あるものは他のものよりももっと野蛮で、残酷で、卑怯であるけれども、かれらはおしなべて、愚かで、無知で、技芸と勤勉を欠いている。」(北アメリカ・インディアン)等々。対照的に、「もっとも温和な気候は、北緯40度と50度とのあいだに存しており、それは、もっとも均整がとれて美しい人を生み出す。人類の純粋な色や美の多様な程度にかんする思想が引き出されるべきは、この気候からである...この地帯のもとに位置して文明化されたのが、グルジア、コーカサス、ウクライナ、ヨーロッパ・トルコ、ハンガリィ、ドイツ南部、イタリア、スイス、フランス、スペイン北部である。これらの諸領域の原住民は、世界でもっとも端麗でもっとも美しい人々である。」<sup>(37)</sup>

まさしく、「この時代の最良の経験的研究の成果」と考えられるビュッフォンの著作は、「人間の多様性を、人種主義的なことばで説明している。」<sup>(38)</sup>

要約すれば、白人は、美、知性、文明の観点からみて、最良であり、他のすべてのものは、なんらかの程度の退化・劣化をこうむっている。ところで、ビュッフォンは、このような退化・劣化状態を、永遠で固定的だとはしておらず、同じ文脈でその治療策を明示しているのは興味深い。すなわち、これら退化・劣化の状態にあるすべての人々をパリとコーカサス山脈のあいだのベルト地帯へ移動させることによって、かれらをフランスの食物で養育することによって、そして、かれらにヨーロッパの教育と生活様式を与えることによって、数世代で、すべての人々は、白くなり文明化されるであろう。<sup>(39)</sup>

ところで、劣化理論のもうひとつの典型は、ヒュームにみられる。かれによれば、「黒人たちと、一般に他の種の人間(4か5の異なる種が存在するという)の全ては、生まれながらに、白人たちよりも、劣っている、と思う。白人以外に、他のど

のような混血でも、文明化された民族は、決して存在しなかったし、行動であれ思弁であれ、卓越したどんな個人でさえも、全く存在しなかった。かれらのあいだには、どんな独創的な工業品も全く存在しないし、どんな技芸も、どんな科学も、全く存在しない。...黒人奴隷はヨーロッパ全体に分散されており、そのどこでもどんな発明の才も発見されず、無教育の、あの低階級の人々は、われわれのあいだに出現し、全ての職業で目立つようになるであろう。ジャマイカでは、確かに、かれらは、黒人を有能で学識ある人間として語っているが、しかし、これは、かれ[黒人]が、はっきりと2、3語をしゃべるオウムと全く同じ素晴らしい才芸のゆえに賞賛されているということらしい。」<sup>(40)</sup>

さて、この表現が常道を外れた偏見を表しており、ヒュームの哲学一般と無関係であると考えるかどうかは別にして、ヒュームがまたアイルランド人、カソリック、宗教人たちについて偏見をもった批評をしていることを思い出せば、上述の人種主義的な見解もこの流れに沿うものだと結論できるであろう。しかも、一部植民地問題を取り扱った副書記官としてのヒュームの役割と、そして、かれのエッセイ「国民性について」の影響力をふくめて探求されるとき、非白人にかんする、かれの見解は、つかのまの・はかない観察として見逃すことはできない。それは、かれの思想と18世紀思想の諸問題のひとつ、すなわち、人類の残りにたいするヨーロッパ人の優越性の正当化、に密接に関係している。<sup>(41)</sup>

非白人は誰も文明、すなわち、技芸と科学に全く貢献してこなかったという、ヒュームの包括的な主張を、確認されたものとして受け取ったのが、エドワード・ロングの主張であった。かれは、中国人、メキシコ人、そして北アメリカ・インディアンには知的能力を認めようとしたが、アメリカの黒人奴隷について語るとき、次のように述べた。すなわち、「われわれは、かれらが、大陸のかれらの仲間たちを卑しめているのと、同じ、野獣のような振る舞い、愚かさ、悪徳を刻印されているのを発見する。そして、かれらは、...抽象的に言って全ての種類の内在的な卑劣さで、人類の残りから区別されるように見える。すなわち、性格のこの暗部を軽くする、たったひとつの美德もほ

とんどもたないで、他の全ての人間からこの特殊な人間を区別されているのが発見されている。というのは、他の諸国では、われわれがかって耳にした、もっとも破廉恥なヴィレン「農奴」でさえ、すくなくとも、かれの気質にいくらかの良い性質ももたなかったなどとは、もしあったとしても、めったに知られていなかった。かれらは、何百年ものあいだ、ヨーロッパ人と近づきになり、また、ヨーロッパ人の製造業に精通してきたけれども、この時の流れのすべてにおいて、技芸、あるいは、発明であれ模倣であれ、天才的なものにほとんど嗜好を示さなかったことは、驚くべきである。われわれは、この広大な大陸の非常に多くの地方で、そしてまた非常に多くの何百万の人々のあいだで、機械技術、あるいは、製造業について何がしかを理解する、ひとつつかふたつの取るに足らない部族についてのみ耳にするだけであったし、これらの部族でさえ、大部分、おそらく、オランウータンが、ほとんど苦痛なしにやるようになったのと全く変わらず、非常に無様でずさんなやり方でかれらの仕事をすると言われている。」<sup>(42)</sup> さらに、ロングは、ヒュームを引き合いに出す。すなわち、「ヒューム氏は、現地アフリカ人にかんする彼の観察から、かれらが人間種の残りよりも劣っており、人間精神のもっとより高度な学識・技能に全く到達できないと大胆に結論している。」<sup>(43)</sup> と。

ポップキンによれば、このような知的諸要因の見地から、最も馬鹿な白人でさえ、「最も賢い」黒人や赤色人や浅黒い人や煤のような色の人よりも、人間の哲学的定義に、より近いことを確認した他の例は、『エンサイクロペディア・ブリタニカ』の最初のアメリカ版の、「アメリカ人」、「肌の色・顔色」「黒人〔ニグロ〕」の諸項目に見られる。たとえば、「黒人〔ニグロ〕」の項目は、次のように始まる。すなわち、「黒人〔ニグロ〕、黒い肌の人属、完全に黒く、熱帯で、特に熱帯内にあるアフリカの地域で発見される、いろいろな人間種に与えられた名称。肌の色ではわれわれは多様な色合いに出会うが、かれらは同じように、かれらの顔の特徴全体で、他の人間とはるかに区別される。丸い頬、高い頬骨、いくらか盛り上がった額、短くて広くて低い鼻、厚い唇、小さな耳、醜さ、体系の不規則性、〔これら〕が、かれらの外見の様相を特徴づけている。... 最も周知の悪徳

は、この不幸な人種の一部であるように見える。すなわち、怠惰、不実・裏切り、復讐・報復、残酷、無礼・横柄、盗み、虚言、不敬・冒瀆、放蕩・不摂生、淫ら・猥褻、暴飲・深酒が、自然法の諸原理を無効にし、良心の叱責・とがめを沈黙させてしまったと言われている。かれらは、全ての思いやり・哀れみの感情に無縁の人たちであり、放任されたときの人間の墮落のおそるべき例である。」<sup>(44)</sup>

ところで、同じような思想構造をもっていたのが、18世紀の言語研究であった。ブラッケンによれば、哲学者たちや人類学者たちは、「言語が精神の反映だと考えてきた」だけでなく、「劣った言語による会話は劣った人々の劣った精神の刻印である」として、「言語の相違による、‘先天的な劣等性’」なる「言語的人種主義」的思考を、しばしば、もっていた。<sup>(45)</sup>

こうして、18世紀の言語にかんする研究は、しばしば、インディアンとアフリカの諸言語の構造と内容が、他の諸言語のあいだにあって、難しい知的観念を表現するのに不適切だとする取り扱いをしている。

ポップキンによれば、たとえば、ハリスは、「最大で最良の考えをもつ、最も賢明な民族が、当然の結果として、最良でもっともな内容・情報の豊富な言語をもつであろう。」<sup>(46)</sup> と主張した。また、ジェイムズ・バネットすなわちモンボド卿は、かれの『言語の起源と進歩について』（ロンドン、1773年）で、野蛮な諸民族の諸言語の劣等性を説明して、次のように述べた。すなわち、「というのは、良く知られているように、野蛮人は、すくなくとも、精神のなんらかの行使にかんして、ひじょうに怠惰であり、好奇心や知的欲望によって、行動へ駆り立てられることはほとんどない。」と述べたと言う。<sup>(47)</sup> さらに、ヨハン・ゴットフリッド・フォン・ヘルダは、ギリシャ語、ロマン語、ドイツ語、ゴール語の素晴らしい特徴を説明した後に、それから、アフリカの諸言語へ移って、「アフリカ語の物臭な口ごもった発音が不完全でだらけている」と宣言した。<sup>(48)</sup>

以上のような過程を経て、劣化理論は、その内部に、劣化の状態の固定化と宿命論や奴隷制の正当化・擁護者から、環境や教育による劣化状態からの脱出の可能性を説く、善意の「自由主義的人

種主義の一形態」<sup>(49)</sup>まで、いろいろな立場をふくみながら、19世紀の「科学的」な基礎に基づく

人種主義へとそのバトンを渡すことになる。

(未完)

#### 注

- (1) H.M.Bracken, *Essence, accident and race*, in: *Hermathena*, (Winter, 1973), p.81.
- (2) デリック・ベル著 中村輝子訳『人種主義の深い淵——黒いアメリカ・白いアメリカ——』朝日新聞社(朝日選書 543)、1995年、6 ページ。
- (3) このような試みの最近の成果のひとつが次のものである。池本幸三・布留川正博・下山晃『近代世界と奴隷制 大西洋システムの中で』人文書院、1995年。
- (4) Richard H.Popkin, *The Philosophical Bases of Modern Racism*, in: Craig Walton and John P.Anton (eds.) *Philosophy and the Civilizing Arts: Essays in Honor of Herbert W.Schneider*, Athens (Ohio U P), 1974, p.126.  
引用文中の [ ] 内の文章は、筆者(高田)が追加したものである。以下でも同様である。なお、ポップキンの上の論文については、以下では、Popkin 2 として示す。
- (5) 反ユダヤ主義は、キリスト教の成立以来の、ユダのキリストにたいする裏切りに始まる、宗教的な敵対心を根拠として、古くからのものであるが、イベリア半島では、いわゆるレコンキスタの進行とともに、イスラム支配のもとで自由な活動を謳歌して、政治・経済の各方面で大きな勢力を築き上げていたユダヤ人にたいする妬みや反感が、新教の自由のもとにあったユダヤ教にたいする敵対心とともに、民衆のあいだでも顕著になってきていた。たとえば、1391年には、1248年に既に回復されていたセビリアで、大きな反ユダヤ暴動が起こり、ユダヤ人4千人が殺され、ポグロムが、スペイン全土に波及し、これを契機に、ユダヤ教徒が集団でキリスト教に改宗したが、このような改宗者は、新キリスト教徒として、特にユダヤ人改宗者にたいしては、面従腹背の「隠れユダヤ教徒」として常に疑惑の眼をもってみられていた。ここで言う新旧キリスト教徒とは、ドイツ宗教改革以後に言うプロテスタントとカソリックの意味での新旧キリスト教を指すのではない。

なお、この集団改宗を機に生まれた、「マラーノという、表向きの同調と内的な反抗に引き裂かれたユダヤ人改宗者」の特異な存在とそのヨーロッパ近代の精

神文化に及ぼした影響に触れたものに、次のものがある。小岸昭『スペインを追われたユダヤ人——マラーノの足跡を訪ねて』人文書院、1992年。上の引用は、同書11ページ。

- (6) Popkin 2, p.126.
- (7) Ibid., p.127. このような「血の純粋性」の確認・証明要求は、ナチスの「アーリア神話」にもとづく、ユダヤ人絶滅政策に通じているように思われる。Cf., Leon Poliakov, *Le Mythe aryenne*, Paris 1972. L. ポリヤコフ、アーリア主義研究会訳『アーリア神話』法政大学出版局。
- (8) Ibid., p.127. 1478年に、ローマ法王シクストゥス、スペインに異端審問所設置に関する教書発布。1480年、セビリアに異端審問所設置。コルドバ(1482年)、セゴビア(1483年)、アラゴン(1484年)にも設置。1481年には、セビリアでの最初の宗教裁判で、6人のマラーノが火刑に処せられた。参照、小岸昭前掲書、306～7 ページ。特に、セビリアについては、同書「第5章火刑都市セビリア」参照。また、同書「第4章グラナダ1492年」によれば、1492年のユダヤ人追放令によって、「16万5000人以上が国外へ移住、少なくとも5万人が後に残り、改宗の道を選んだ」が、国外移住のうち12万人がポルトガルに移り、1391年の際の改宗者とこの時の改宗者をふくめて、スペイン残留マラーナは、全体として、移住者の数を上回るとされている。
- (9) Popkin 2, p.127. 小岸昭前出書第1章の「星の山とマラーノの国」で、1917年に、ひとりのユダヤ人鉱山技師によって発見された、北ポルトガルの山間部で、外界との接触を完全に遮断して隠れ住んでいる、一万ものマラーナ家族について触れている。かれらは、自分たちが世界で唯一生き残ったユダヤ人だと信じていたという。参照、小岸前掲書「第1章ユダヤ人の不安」。
- (10) Ibid. p.127. ところで、ポップキンが言うように、このような考えは、「万人を改宗させることが本質的なキリスト教の使命であるという、また、人々は、ひとたび改宗すれば、この[キリスト教徒の]集団の平等な成員であるという、キリスト教の支配的な命題に



反していた。」(Ibid.) また、「法王と国王をふくむ、すべての種類の有名なキリスト教の指導者たちは、ユダヤ教と異教徒からの改宗者であった。」(Ibid.) という明白な事実にも矛盾するように感じられるが、15世紀に強くなる「一国家・一民族・一宗教」政策や、狂信的な「宗教的純粋性」と「血統の純粋性」の追求は、ユダヤ人の血を引く上述のキリスト教指導者によって、自己の存在証明をなすものとして、より厳格に遂行される傾向をもったのかも知れない。同様に、象徴的なのは、かの名高い初代大審問官トマス・トルケマダは、ユダヤ系修道士であったという。以上については、小岸前掲書、特に第4章、第5章参照。

(11) Ibid., p.128.

(12) とりあえず、次のもの参照。増田義郎『新世界のユートピア』中公文庫。

(13) Popkin 2, p.128.

(14) 「インディアンは、『聖書』の人々の移住まで遡ることのできる、ある集団に由来するにちがいがなかった(ヨーロッパ人がかれら自身の起源をノアとその家族のいろいろな子孫まで遡ったように)。こうして、インディアンは劣等な状態でおかれた、イスラエルの失われた部族であると主張する、理論が提案されたし、インディアンはフェニキアあるいはアラブ起源である、インディアンはアジア人である、そしてインディアンはスウェーデン人、すなわち、リーフ・エリクソンの探検隊の隊員の子孫であるという理論さえも提案された。」(ibid.)

ところで、ポップキンによれば、『聖書』が全人類の起源と歴史を描いているという主張に反する、もっとも危険な理論は、インディアンは完全に『聖書』の世界から登場したものではないというもの、すなわち、インディアンはアダムとイヴの子孫ではなくて、別の独立した起源をもつ、すなわち、かれらはアダム以前の人々 Pre-Adamites [前アダム人] であるというものであった。」(ibid.) ポップキンは、この「前アダム人論」を「近代人種主義のもっとも毒々しい・悪意に満ちた形態」(ibid.) だとしている。

(15) Cf., Popkin 2, p.129.

(16) ポップキンは次のものから引用している。Cf., Lewis Hanke, *The Spanish Struggle for Justice in the Conquest of America* (Philadelphia, 1949), p.125, cited in Popkin 2, p.129. 次のものが本書の邦訳である。染田秀藤訳『スペインの新大陸征服』平凡社、1979年。

ハンケは、この著作とかれの、*Aristotle and the American Indians* (Chicago, 1959) でインディアン の地位・身分をめぐる論争を吟味している。後者については、同書の邦訳である『アリストテレスとアメリカ・インディアン』(佐々木昭夫訳、岩波新書) を参照。

(17) アリストテレスの『政治学 *Politics*』の最善のルネサンス版を編集した、セプールベダは、インディアンが、アリストテレスが生まれながらに奴隷であるとして記述した人々であると、熱心に主張した。そしてまた、もしかれらが自然奴隷だとすれば、その時には、神によって、かれらは奴隷化されるべきであり、スペインの栄光のための仕事につけられるべきであろう。もうひとりのコンキスタドールの理論家である、オビエードは、インディアンは理性の働き(アリストテレスによれば、人間であるための一条件)、倫理性を欠いており、このゆえに、キリスト教徒となったり実践することができないと論じた。したがって、かれらは、かれらの生まれながらの獣性を克服する、充分な道徳的指針のために、スペイン人の支配に従わねばならないのであった。Cf., Popkin 2, p.129. また、前出ハンケ『アリストテレスとアメリカ・インディアン』、石原保徳「コロンブスからラス・カサスまで——「発見＝征服」の時代を問う——」『インディアスを読む』現代企画室1984年所収、特にオビエードについては、同「三 植民者の執念——フェルナンデス・デ・オビエード——」同52～65ページ参照。

ところで、セプールベダとオビエードについて、最近翻訳が出されている。セプールベダ『征服戦争は是か非か』(染田秀藤訳) 岩波書店、1992年(アンソロジー新世界の挑戦7)、オビエード『カリブ海植民者の眼差し』(篠原愛人・染田秀藤訳) 同、1994年(同4)。

(18) ラス・カサスについては、次のもの参照。染田秀藤『ラス・カサス伝——新世界征服の審問者——』岩波書店、1990年、カサス『インディアスの破壊についての簡潔な報告』(染田秀藤訳) 岩波文庫、ラス・カサスの畢生の大著『インディアス史』も、大航海叢書第Ⅱ期第21巻～第25巻で翻訳されている。『インディアス史』(長南実訳増田義郎注)(一)～(五)、岩波書店、1981年～1992年。また、そのほかに次のような翻訳も出されている。カサス『裁かれるコロンブス』(長南実訳) 岩波書店、1992年(アンソロジー新世界の挑戦1)、同『インディオは人間か』(染田秀藤訳)

同、1995年（同8）、同『歴史の発見』（同訳）同、1994年（同13）。また、石原 保徳『インディアスの発見——ラス・カサスを読む——』（田畑書店1980年）、同前出「コロンブスからラス・カサスまで——「発見＝征服」の時代を問う——」、前出ハンケ『アリストテレスとアメリカ・インディアン』、同『スペインの新大陸征服』など参照。ところで、コンキスタドールは、単なる「征服」、「征服者」ではなく、「聖なる戦い」であり、「正義のキリスト教戦士」であるとする解釈にたいして、ラス・カサスは、かれらの行為を「犯罪」と断罪し、かれらを「ティラーノス〔法を蹂躪する人々〕と呼んだ。このような「正義の戦士」像のひとつが、次のものに例示されている。J. H. エリオット『旧世界と新世界——1492～1650——』（越智武臣・川北稔訳）岩波書店、1975年。

(19) Popkin 2, p.130.

(20) ポップキンは次のものから引用している。Lewis Hanke, *The Spanish Struggle for Justice*, p.73, cited in Popkin 2, p.129. また、次のものも参照。Cf., Richard H. Popkin, *The Philosophical Bases of Eighteenth-Century Racism*, in: *Racism in the Eighteenth Century (Studies in Eighteenth-Century Culture, Vol. III)* (Cleveland & London, 1973), pp.247-248. 以下では、この論文については、Popkin 1 と略記する。

なお、この教皇教書には、1537年6月9日の日付があるという。これについては、ハンケによる別の研究がある。Cf., Lewis Hanke, *Pope Paul III and the American Indians*, in: *Harvard Theological Review*, XXX (1937), pp.65-102.

(21) Cf., Popkin 2, p.130. ポップキンによれば、アメリカ大陸での最初の哲学教授である、アロンツォ・デ・ラ・ヴェラ・クルスは、メキシコ大学での、最初で唯一のかれの講座で、「スペイン人はインディアン支配のなんらの権利も決してもっていないこと、したがって、スペイン人はヨーロッパへ戻るべきであり、インディアンをかれらだけにしておくべきであろう」(Ibid.) と論じた。もちろん、デ・ラ・ヴェラ・クルスは、教授を解任されて、ユカタン半島低地へ送られたという。

(22) この大論争については、次のもの参照。Cf., Lewis Hanke, *Aristotle and the American Indians...* 同前出邦訳、とくに、Ⅲ「ラス・カサスとセプルベダの前哨戦、1547-50年」、Ⅳ「バリャド

リ大論戦——舞台装置——1550-51年」、Ⅴ「バリャドリ大論戦——アリストテレスの先天的奴隷人説のインディオへの適用——1550-51年」、Ⅵ「バリャドリ大論戦——インディオに対する正義の戦争の遂行——1550-51年」、参照。

(23) Popkin 2, pp.130-131.

(24) Popkin 1, p.245.

(25) Popkin 2, p.131.

(26) ヒュームの『人性論』には、もともと、「道徳的諸主題に理性の実験的方法を導入する試みである」とする副題がついている。Cf., David Hume, *A Treatise of Human Nature*, ed. by L.A. Selby-Bigge, Oxford, 1985. つぎの邦訳では、この部分の訳は「実験的論究方法を精神上の主題に導入するひとつの企てである」となっている。大槻春彦訳『人性論』岩波文庫（全4冊）、（一）表題参照。ここでいう、「理性の実験的方法」とは、ニュートンが、道徳哲学の諸領域にまで拡大できるとした、自然哲学の実験的方法である。ニュートンの自然哲学が18世紀思想におよぼしていた普遍的な影響の一端については、簡単ではあるが、次のもの参照。拙著『18世紀スコットランドの制度と思想』時潮社、1991年、第2部第1論文「アダム・アダムの思想体系とニュートン」173～187ページ参照。

(27) Popkin 2, p.131. ところで、啓蒙主義には、もうひとつの考え方に、文明を人類の墮落と悪徳と見なして、未開・野蛮をそれに対抗する、あるいは、墮落以前の状態を維持している「高貴なる未開人」との考えが存在していることは、良く知られている。この意味で、インディアンは、その未開なる状態であるがゆえに、尊いとするものである。

(28) 一般的な『聖書』解釈では、一定の人々の肌の色を黒くするときに、神はまた、かれらに災いが下るように願われたのであり、劣等な人間の地位・身分にあるように有罪判決を下されたのである。このような『聖書』の説明は、最初にヨーロッパ人の、そしてそれから白人の優越性を説明しようと願う、人種主義者にとって、通俗的な説明であったし、依然として、そうである。ハムの呪い、イスラエルの拒絶、そしてイエスをメシアとして承認するのを拒否したとする、ユダヤ人にたいする拒絶は、反ユダヤ主義の態度を正当化していたし、多くのイギリスとアングロアメリカンの理論家たちによってアフリカ人の奴隷化を正当化するために変容されて採用された。アフリカ人（すな

わち、エチオピア人)は、神の行為の結果として黒くなったし、それによって、永久に劣等だとされた。他方、ユダヤ人は、神によるかれらの拒否によって汚されたのであり、その結果として、特別に不愉快な臭い(そしておそらく尻尾と角)を発達させられた。このすべては、時の終わりまで、真理のままであろう。

Cf., Popkin 2, pp.131-132.

(29) Popkin 2, p.132. ポップキンによれば、すくなくとも、モンテーニュからカントまで、支配的な主題は、人間がその心理学的あるいは精神的な状態によって、洞察されたり、定義されたりしていることである。モンテーニュは、みずから(そしておそらく他のすべての人々が同じことをすることができるであろう)、かれの意識の内的な流れによって、かれの思想と感情を描き出した。デカルトは、自己を思考する実体として定義した。等々。

(30) Popkin 1, p.245.

(31) ポップキンはまた次のように言う。すなわち、「モンテーニュ以来、デカルト、ホッブズ、スピノザ、マルブランシュ、ジョン・ロック、ライプニッツ、バイル、バククリ、ヒューム、カントのそれらをふくめて、近代の人間性にかんする支配的な諸理論は、すべて、普遍的である。それらは、すべて、人間を、知的で心理学的な特徴の見地から定義している。大きさ、肌の色、宗教的信仰、等々は、一定の個人が人間だと考えられることができるかどうか、また、かれが動物や機械から区別される、確かなやり方で取り扱われるかどうか、という問題に踏み込むことはない。しかしながら、人間性にかんするこのような諸理論を発展させることのできた、啓蒙主義の同じ人々が、また、ある個人、實際上、幾百万の人々が、肌が黒いとか、間違った宗教を受容しているがゆえに、人間より劣っていると主張する、諸理論のための基礎を与えることができた。いかようにして、この現象は説明されるのか?」と。Cf., Popkin 1, p.246.

もちろん、このような人種主義的な見解・思想が、かれらの普遍的な人間性論にとって、偶然的あるいは単なる逸脱であって、かれらの普遍的な理論・思想をなんら傷つけるものではないとする弁護論も、当然存在している。とりあえず、ロックにかんする議論の一端については、次のもの参照。拙稿「ジョン・ロックと奴隷制にかんする諸問題」『研究季報(奈良県立商科大学)』4-4(1994)、同「ジョン・ロックと奴隷制にかんする諸問題(続)」同、5-4(1995)。

(32) Popkin 2, p.133.

(33) Ibid.

(34) Ibid.さらに、ロックと奴隷制と植民地問題については、次のものとそこで紹介した文献を参照。前出拙稿「ジョン・ロックと奴隷制にかんする諸問題」、「ジョン・ロックと奴隷制にかんする諸問題(続)」、同「18世紀スコットランドの思想と奴隷制問題」『研究季報(奈良県立商科大学)』3-1・2・3(1992)。なお、次のものは、ロックをふくめ、西欧思想・文化における奴隷制問題を総括的に扱っている。Cf., David B.Davis, *The Problem of Slavery in Western Culture*, Ithaca (Cornell University Press), 1967 (c1966).

(35) Ibid., pp.133-134. ポップキンは、近代生物学の創始者とされる、リンネによる人類の分類にも潜んでいる、人種主義的偏見を指摘している。たとえば、「ヨーロッパ人。容姿良く、多血質、屈強。髪、金髪、褐色、緩やかに垂れる。眼、青。穏やか、鋭く、発明の才。ぴったりした衣服で身をおおう。法による支配。...アメリカ人(すなわちインディアン)。褐色の肌、胆汁質、直毛。髪、黒く、まっすぐ、薄い。鼻孔、広がっている。顔面、ざらざらしている。あご髭、乏しく、頑固、満足、気まま。素晴らしい赤の線で自己を描く。慣習・習慣によって規制されている。...アフリカ人。黒[い肌]、無気力、のんびり。髪、黒、ちじれ毛。肌、絹のように滑らか。鼻、平面的。唇、厚い。悪賢く、怠惰、怠慢・無関心。脂を体に塗る気まぐれによる支配。」Linnaeus, (Karl von Linne), *A General System of Nature through the Three Grand Kingdoms of Animals, Vegetables, and Minerals* (London, 1806), I, section "Mammalia Order 1. Primates.", cited in Popkin 2, pp.134-135; Cf., Popkin 1, p.248.

ポップキンによれば、白人の優位を解く、この時代の人種主義的偏見を免れていたひとつの例外が、次のものである。それによれば、「白人の人々は、歴史からにしろ哲学からにしろ、どんな人種よりも、...ノアとかれの息子たちにおける、人類の始元的で最初の結合から、インディアンや黒人たちよりも、もっと劣化してしまっているように見えるからである。」John Mitchell, *An Essay upon the Causes of the Different Colours of People in Different Climates*, in: *Royal Society of London Philosophical Transaction*, XLIII (1744-45), p.146,

cited in Popkin 2, p.134.

- (36) George Louis Leclerc, Comte de Buffon, *Natural History, General and Particular*, tras. by William Smellie, 2nd ed. (London, 1785), III, The Natural History of Man, Sec. IX," Of the Varieties of the Human Species," pp.60, 65, 146, 170, 181, 207, 205-07, cited in Popkin 2, pp.135-136; Popkin 1, pp.250-251, 259ns. 16, 18.

(37) Popkin 2, p.136.

(38) Ibid.

- (39) いうまでもなく、これもまた、同じ人種主義的偏見にたっているに過ぎないことは明白である。ここにこそ、自己批判的なイデオロギイ批判の重要性があると思われる。これはまた、マルクスの経済学が、経済学批判であったことの深い意味にも通じるであろう。

ポップキンによれば、ビュッフォンは、次の世紀の劣化理論にモデルを提供した。かれの見解は、ケイムズ卿、オリヴァ・ゴウルドスミス、ブルメンバッハ（人類学の公式の創立者）やかれの後継者、ジェイムズ・プリチャードによって、模範とされ、改良を加えられた。ところでまた、ビュッフォンをふくむ、劣化理論の支持者たちのあるものは、奴隷制に反対したし、あるものは、非白人たちの状態の改善のために戦った。たとえば、ブルメンバッハとプリチャードは、一方で、現在の黒人とインディアンの劣等性の原因を肉体的および環境的諸要因の観点から、診断・究明しながら、問題の状態を決して変えることができないと主張した、より悪意のある人種主義者たちにたいして、もっとも強力に戦った。ブルメンバッハは、アフリカ人を、“かれの黒い兄弟たち”と呼び、非白人たちが白人と同じ種類の文明を成就・実現できる潜在性をもっているという、証拠を提供し続けた。かれは、このことが既に生じている事例——すなわち、黒人作家、黒人科学者、黒人芸術家の事例——を指摘した。プリチャード（黒い肌の色を除いて、ヨーロッパ人と同じように見える、非白人にかんする、もっとも理想化され、ヨーロッパ人化された画像を与えた）は、伝道が毎日証明しているように、誰でもキリスト教への改宗者となることができるという、事実を訴え続けた。したがって、すべての人々は、最善のヨーロッパ人と同じぐらい良き人である潜在性をもっている、と主張した。Cf., Popkin 2, pp.136-137.

ポップキンは、劣化理論から出発しながら、18世紀

の指導的反人種主義者であった、グレゴワール神父 The Abbe Gregoire (Henri Gregoire) の例をあげている。ibid., pp.137-138.

かれはまた、次のことを鋭く指摘している。すなわち、グレゴワールの人道主義的思想も、結局のところ、かれがたいそう尊敬していた、ラス・カサスと同じように、ヨーロッパの経験の最善のもの（とりわけキリスト教とキリスト教文化）を、万人の模範・典型にし、そして、人類の最終的な完成の本質を万人が創造的なヨーロッパ人（とりわけキリスト教徒）になることであるという、自由主義的人種主義の一形態である、と。ibid., p.138.

- (40) David Hume, "Of National Characters," *Essays, Moral, Political, and Literary*, ed. by E.F. Miller, Liberty Classics, Indianapolis 1985, p.208n10, cited in Popkin 1, pp.245-246; Cf., Popkin 2, p.143; H.M. Bracken, op. cit., p.82; David B. Davis, op. cit., pp.456f.

(41) Popkin 1, p.247.

- (42) Cf., Edward Long, *The History of Jamaica* (London, 1774), Vol. II, Book III, chap. 1, "Negroes," pp.354-355, cited in Popkin 1, p.256-257n10.

(43) Long, *ibid.*, p.376, cited in Popkin 1, pp.257n10.

- (44) *Encyclopedia Britannica*, 3rd ed. (Philadelphia, 1798), XII, 794, cited in Popkin 1, pp.257-258n11.

さらに、ポップキンによれば、『エンサイクロペディア・ブリタニカ』は、この種の見解を20世紀まで解説し続けたという。たとえば、9版（ニューヨーク、1884年）17巻、「黒人」で、ロンドン大学ユニヴァース・コリッジの A. H. キーン教授は、黒人の頭蓋骨の合わせ目が他の人種におけるよりもはるかに早く閉じると説明した。「頭脳のすべてのより以上の発展を妨げる、頭蓋骨のこのような未熟なままの硬化・固定化に、多くの病理学者たちは、黒人の生得の知的劣等性、かれらの肉体的差異より以上にさえ特徴づけられる劣等性の原因があると考えた。ほとんどすべての観察者たちは、黒人の子どもが概して他のいろいろな人間の子どものと全く同じ知力をもつこと、しかし、成熟期に達するにつれて、それ以上のすべての進歩が阻止されるように見えることを承認している。」「黒人について、不道德的だというよりも、道徳に無関心だと言

うのが、より正確である。」「どんな純血の黒人もかって、科学者として、詩人や芸術家として、目立ったり・有名であったことは決してなかったし、そしてまた、無知な博愛主義者たちによって、かれのために要求された、基本的な平等〔論〕は、歴史時代全体にわたる、この人種の全歴史によって、誤りであることが示された。」*Encyclopedia Britannica*, 9th ed. (New York, 1911), XII, pp.317, 318, cited in Popkin 1, p.257n11; Bracken, op. cit., 89.

また、『ブリタニカ』の有名な11版では、トマス・アソール・ジョイスによる、“黒人”の項は、同じ源泉、フィリポ・マネッタの『*Larazza negra nel suo stato selvaggio* (Turin, 1864)』から取られた、黒人の頭蓋骨発達にかんする、同じ理論を繰り返している。それから、この論文は、次のように言っている。すなわち、「この説明は、論理の通った・正当なものであり、白人にたいする、黒人の知的劣等性にかんして貢献できる思想として、充分な根拠をもっている。しかし、この主題にかんして、証拠は不足しており、知的発達の阻止あるいは低下は、疑いもなく、思春期後性的な諸問題が黒人の生活と思想において初めて生じるという事実、ひじょうに多く負っている。...しかし、白人種と黄色人種にたいする、黒人の知的劣等性は、ひとつの事実であるけれども、しばしば、誇張されてきた。というのは、黒人は、大いに、環境の創造物である。」*Ibid.*, 11th ed., XIX, p.344, cited in Popkin 1, p.257n11.

また、15版では、黒人が他の人種と如何に区別され

るかにかんして、中立的な説明を与えているという。Cf., Popkin 1, pp.257-258n11.

以上については、また、次のものも参照。Cf., Popkin 2, pp.138-139.

ところで、次のものも簡略ながら同じ主題をあつっている。Cf., H.M.Bracken, op.cit., pp.89-90.

(45) Cf., H.M.Bracken, op.cit., pp.81, 91.

(46) James Harris, *Hermes: or a Philosophical Inquiry concerning Language and Universal Grammer* (London, 1751), pp.407-26, cited in Popkin 1, p.256n9.

(47) James Burnet (Lord Monboddo), *Of the Origins and Progress of Language*, Vol.I, p.182 (London, 1773), cited in Popkin 1, *ibid.*

(48) *Herder sämtliche Werke*, hrg. von Bernhard Suphan (Berlin, 1877-1913), I, 1-2, cited in Popkin 1, *ibid.*

(49) Popkin 2, p.138. ポップキンは、この「自由主義的人種主義」なることばを、「18世紀の指導的な反人種主義者」であり、「ユダヤ人とアフリカ人の平等のために論じること、かれの生涯を捧げた」グレゴワール神父の人道主義に適用し、ラス・カサスと同じように、「人種主義的抑圧の解決」を、結局のところ、「ヨーロッパの経験の最善のものを、万人の模範・典型にし、そして、人類の最終的な完成の本質を万人が創造的なヨーロッパ人になることである」とする思想だとし、ラス・カサスにも当てはまるとしている。Cf., *ibid.*, pp.137, 138. 本稿の注④も参照。